不思議な森へと

迷いこんだ

少年健太と猫のメグ。

健太とメグは

それぞれひとつづつの願いを

そこで出会った

森の精に

叶えてもらうことに…。

さてさて、

果たしてどんな世界が

ふたりの未来に起るのか？

地球の環境と

真の豊かさを考える——。

こどもからおとなまで

読んで学ぶ

不思議な絵本。

エコエコ研究会

森の記憶

ECONOMY AS ECOLOGY

「森の記憶」発行にあたって

『森の記憶』は実に夢のあるお話なのです。

「地球にやさしい」ということばをよく聞きます。「地球を守ろう」という文字もよく目にします。空瓶のリサイクルだったり、燃費のいい自動車だったり、ゴミの分別収集だったり…。
確かに地球は大切です。私たちの存在そのものの大前提だから。でも私たちは地球を守るためだけにがんばっているのでしょうか？違いますよね。それに環境問題も遠い問題のようだし。「世界中の森林が崩壊されています」と教えてもらってもやっぱり本も読みたいし、新しい家具も買いたい。ヒトの欲求はいまさら抑えられないのです。
では、このまま無駄な消費を続けるのですか？このまま地球をいじめつづけるのですか？…

私たちエコエコ研究会は「地球と自然の再生産能力にあうように資源を使いましょう」というコンセプトで活動をしています。そして、その活動の目的はズバリ「真に豊かな生活」の実現。
みなさん！豊かさの実感がありますか？確かに日本は世界一のお金持ちです、統計的には。
でも何かが違いますよね。私たちはそこをどうにかしたい！と思っているのです。

みなさん！自分の生活を、家族の生活をもっと豊かにしようではありませんか！
自分の大切な人に接するように地球に、自然に接して下さい。そして「ECO-ECO Economy as Ecology」という、ちょっとした知恵を身に付けて下さい。きっと私たちもココロ豊かになれるはずです。みんながしかめっ面して環境問題がんばっているより、みんながニコニコして人生を楽しんでいる方がきっと地球も喜ぶんじゃないかな、私たちはそう思って活動を続けています。

1.不思議な森

「あーあ、猫はいいな。宿題もないし、好きなだけ遊んで、好きなだけ眠れるもん」
小学４年生の健太くんの膝の上で、子猫のメグちゃんがゴロゴロのどを鳴らし、
気持ちよさそうに眠っています。
健太くんが、近所の公園で捨て猫のメグちゃんを見つけたのは、
１週間前、夏休みに入ってすぐのことです。
お昼ごはんを食べ終わった健太くんは、１週間ぶりにメグちゃんをその公園へ連れて行ってみることにしました。
メグちゃんは、公園のことをちゃんと覚えていました。なつかしい草の香りがします。
うれしくなって、思いっきり駆け出すメグちゃん。
あとを追ううちに、健太くんは公園の裏にある林の中へ。

「あっ！」。
健太くんは、何かにつまづいてころんでしまいました。
そこに横たわっていたのは、だれかに捨てられた大きな本棚です。
扉が半分開いて、なんだか泣いているように見えます。
すると、メグちゃんが半分開いた扉の中へピョンと飛び込んでしまいました。

「メグちゃん、ダメだよ。こっちへおいで」
そう言いながら扉の中に上半身を突っ込んだ途端、
健太くんは深い深い穴の中へまっさかさまに落ちてしまったのです。

気がつくと、健太くんとメグちゃんは不思議な不思議な森の中にいました。
あたりを見回すと、おもしろい形の葉っぱをつけた大小さまざまな木や、
色とりどりの花が咲いた草花がいっぱいです。
見たこともないような葉っぱや花も、たくさんあります。
もう少しで健太くんは、小さな黄色い花をつけた草を踏んでしまうところでしたが、
メグちゃんが急に立ち止まったので、そこに花があることに気付きました。
「こんなにかわいい花、初めて見たよ。ほんとにきれいな森だね。でも、ここはどこなんだろう？」
「そういえば、公園でやさしくしてくれたおばあさん猫に聞いたことがある。
この近くに、森の精が棲む不思議な森があるって」
「森の精？」そう聞き返したあとで、健太くんは思わず自分の耳を疑いました。
今、確かにメグちゃんの言葉が分かったような気がしたからです。
そのときです。
「この森ではね、心と心でもちゃんとお話ができるのよ」
やさしい声とともに、どこからともなく森の精がふわっと姿を現しました。
「森の精だ…」とメグちゃん。健太くんは、あまりの驚きに声も出ません。
「心配しなくても大丈夫。この森からは、いつでも自由に出られるのよ。
それより、さっき黄色い花を踏まなかったお礼に、
ふたりの願いをひとつずつ叶えてあげましょう」
健太くんとメグちゃんは森の精に言われるまま、心の中で願い事をひとつずつ、となえました。

K

2.メグちゃんの願い

ピピピピー、ピピピピー。
目覚まし時計が鳴って、健太くんは目を覚ましました。

するとどうでしょう。
ベッドの横に、人間になった子猫のメグちゃんが立っているではありませんか。
「わたし、一度でいいから人間に生まれ変わって健太くんの妹になりたいって、森の精にお願いしたの」。

メグちゃんは、願いがかなってうれしそうです。

「じゃあ、あれは夢じゃなかったんだ…」
健太くんは、不思議な森で出会った森の精のことを思い出していました。
朝食の時間です。お父さんは半分ほど食べると、
「遅刻だ、遅刻だ」とあわてて家を飛び出して行きました。
健太くんも「またハムエッグ？　もうあきちゃったよ」と半分残して、

さっさとテレビゲームを始めてしまいました。
全部きれいに食べたのは、メグちゃんだけ。
台所でおかあさんが、みんなの食べ残しや、
冷蔵庫の中にある古くなった食材をごみ箱の中にポイと捨てています。

「あー、もったいない！」。
メグちゃんは、思わず叫んでしまいました。

kenta

「健太くん、メグちゃん、もうすぐ出かけるわよ。早く着替えなさい」
今日は、健太くんのピアノの発表会です。
でも、主役はお母さん。
「どの服にしようかしら。これは、この前の授業参観の日に着て行ったし…。
このデザインは、ちょっと流行遅れだし…。
きっとみんな、おめかししてくるでしょうね。
センスが悪くなったって思われるのだけはイヤ。
あー、隆くんのお母さん、何着て来るかしら」
洋服ダンスの中をのぞき込みながら、お母さんは洋服選びに一生懸命です。
そんなお母さんの姿を不思議そうに見つめるメグちゃん。
「自分が好きな服を着ればいいのに…」
「これでもお母さん、近所じゃ『センスのいい奥さん』で通ってるんだって。
だから人の目を気にして、洋服ダンスの中身がどんどん増えちゃうんだよ。
でも、ほとんど流行遅れで着られないんだって。
どこが流行遅れなのか、ぼくには分からないけどね」
「ふーん。古くて着られなくなったから新しい服を買うわけじゃないんだ。
人間って自分に自信がないのかな…」
メグちゃんは、ますます不思議な気持ちになりました。

ピアノの発表会の帰り道、お母さんと健太くんとメグちゃんはデパートに寄りました。

メグちゃんは初めての体験に、あたりをキョロキョロ。

今日は売り出しとかで、どの階も山のような商品と買い物客であふれています。

洋服売場で、お母さんは試着を始めました。

「これが、この秋の流行ね」

どうやら人間は、流行の服を着ていれば安心するようです。

『洋服ダンスの中にたくさん入ってるのに、まだ欲しいのかな。

どうせまた、すぐにあきて着なくなっちゃうくせに…』

メグちゃんは、あきれてしまいました。

健太くんも、「あれ買って！」「これ買って！」を連発。

「いま持ってるの、もうあきちゃったよ。新しいのが欲しい！」

『こうやって新しいのをどんどん買うから、健太くんの家の中はモノでいっぱいなんだ』

メグちゃんは、猫の遊び場としては最高の、

モノがごちゃごちゃ置いてある健太くんの部屋を思い浮べていました。

その夜、夕食が終わって一家団欒のひとときのこと。

新聞の広告を見ながら、お父さんがポツリとつぶやきました。

「カッコイイな、この車。うちの車も、そろそろ買い替えたいな」

「あら、車より家が先よ」

住宅会社のチラシを見ていたお母さんが、すかさず口をはさみます。

「ほら見てよ。こんな家を建てたら、きっとご近所からうらやましがられるわ。ほんとに素敵ね。

この家、中古で買ったから、もうすぐ築30年よ、30年。そろそろ建て替えたいわ」

ふたりの会話を聞いていたメグちゃんが、健太くんに聞きました。

「人間って何年生きるの？」

「80年くらいかな…」

「人間は80年も生きるのに、人間が住む家はたったの30年しかもたないの？　おかしいね」

メグちゃんにそう言われて、健太くんは「うーむ」と考え込んでしまいました。

もう寝る時間です。

でも、ベッドに横になった健太くんとメグちゃんは、なかなか寝付けません。

メグちゃんは、1日だけ体験した人間の世界が想像していた世界とはずいぶん違って、戸惑っています。

健太くんは、そんなメグちゃんの反応が意外でした。

「猫のメグちゃんにとって、人間の世界は楽しくてうらやましくてしかたないはずだ」

そう思い込んでいたからです。

「人間ってほんとに不思議ね。いまでもいろんなモノをたくさん持ってるのに、どうしてもっともっと欲しがるの？」

「そうかなぁ…」

「公園に住んでたおばあさん猫が言ってたよ。これは森の精から聞いた話だけど、

地球にある資源やエネルギーを無駄づかいしている生きものは人間だけだって」

「ほんとに？」

「人間のおかげで、ほかの生きものたちはどんどん暮らしにくくなってるって」

「……」。

健太くんは、何も言えなくなってしまいました。

その夜、健太くんとメグちゃんは恐ろしい夢を見ました。

夢に現れたのは未来の地球。しかし、それは灰色の空と灰色の海に覆われた、

生きものの住めない無残な地球の姿だったのです。

3.健太くんの願い

「だれか助けてー！」

自分の声に驚いて、健太くんはハッと目が覚めました。

本当に恐い夢でした。

「あー、夢でよかった！」

でも次の瞬間、健太くんは飛び上がるほど驚きました。

なんと、今度は健太くんが猫になって、公園の隅に置かれた段ボールの箱の中で、

子猫に戻ったメグちゃんと一緒に寝ていたからです。

「そうだ！　ぼく、森の精に猫になりたいってお願いしたんだ」

段ボールの外に出てみると、草も木も滑り台もブランコもすべてが巨大に見えます。

「こりゃ、おもしろいや！」

猫になった健太くんは、メグちゃんを連れてあちこち探険してみることにしました。

まず向かったのは、公園の裏の林にある大きな本棚の中。

そう、あの不思議な森の入口です。

不思議な森にやってきた２匹は、たくさんの植物や虫、鳥や動物たちと出会いました。

「おはよう！」「元気かい？」。

みんなが、明るく声をかけてくれます。

この森では、みんなが仲良く暮らしているようです。

うれしくなった健太くんとメグちゃんは、あちこちで木や草や虫たちとおしゃべりしながら、

森の奥へ奥へと進んで行きました。

「おなか、すいたね」「うん、だって朝から何にも食べてないもん」。

２匹は、おなかがペコペコになっていることに気付きました。

「あー、きのうのハムエッグ、残すんじゃなかった…」と健太くん。

「じゃあ、こっちへおいでよ！」

そう言って誘ってくれたのは、青と赤のきれいな羽根をした小鳥です。

小鳥の案内で、森の食堂へやってきました。

そこには、大きな大きな木の切り株を利用した食卓がひとつあって、その上に木の実やキノコなどのごちそうが、

まるでお子さまランチのようにおいしそうに盛られています。

食卓の回りに次々と虫や鳥や動物たちが集まってきて、やがて楽しい食事が始まりました。

「こんなにおいしい料理は初めて！」と感動する健太くん。

「わたしも。それに、量もちょうどぴったり！」。

メグちゃんも満足そうです。

すると、小鳥が説明してくれました。

「この森ではね、毎日、みんなが食べるだけの量しか木の実などの食料はとらないんだよ。

たくさんとっても、残すともったいないだろ」。

その言葉を聞いて、健太くんはいつも食べ残してしまう自分が恥ずかしくなりました。

森の食堂

そこへ森の精が現れ、健太くんとメグちゃんを森のもっと奥へと案内してくれることになりました。

「ほら、あそこにいるのが、この森ではおしゃれで有名なリスよ」

森の精が、そっと教えてくれました。

「あそこには、お掃除じょうずなミミズがいるわ」

「いま目の前を飛んでいったのは、きれいな声で鳴くイカルよ」

「あの木の根元では、働きもののモグラが巣づくりに励んでいるわ」

「ちょっと耳を澄ませてみて。キリギリスの自慢の歌が聞こえてくるでしょ」

そう、この森にはいろんな個性や価値観を持った生きものたちが、

お互いの違いを認め合い、お互いに助け合いながら、仲良く暮らしているのです。

「だから、だれも人のまねはしないし、人の目も気にしない。

何が大切かを、みんながちゃんと知っているのよ」

健太くんは、とても真剣な表情で聞いています。

この森の精の言葉の意味を、一生懸命考えようとしていたのです。

途中で出会ったサルが、森の精と２匹を家に招待してくれました。
それは、とても住み心地の良さそうな家でした。
「この家はね、先祖代々大事に住んできた、私たち家族自慢の家なんだよ。
もう200年以上にもなるかなぁ」
「200年以上！」。
驚く健太くんとメグちゃんに、森の精がこんな話をしてくれました。
「自然には再生サイクルというものがあるのよ。
たとえば、いま人間がやっているように、森の木を次々と切り倒した結果、
森が破壊されてしまったとするでしょ。
その破壊された森が再生して、再びもとの森の姿に戻るには200年もかかるのよ。
もし、森から切り出した木でつくった家や家具を200年大事に使うとすれば、
自然の再生サイクルの200年とバランスがとれるからいいけれど、
そんなに長く使わなかったらどうなるかしら」
「森の再生が間に合わないから、森がどんどん減っちゃう！」。
健太くんとメグちゃんは声をそろえて答えました。
「そうね。この森では自然の再生サイクルの期間だけ、その資源を大切に使っているのよ。
だから、自然と仲良くしながら、みんなが本当に豊かな生活を送っているの」

さるHouse

「でも、人間の世界は違うんだよね」。健太くんが、さみしそうに言いました。
そんな健太くんを励ますように、森の精が話し始めました。
「実はね、この森も昔は人間の世界と同じだったのよ。
もうずいぶん昔のことだけど、この森には悪い王様とその仲間が住んでいたの。
王様は欲が深くて、何でも欲しがる王様でね、仲間は王様の言いなり。
やがて、森は無残な姿に変わり果ててしまったのよ。
それでも、王様とその仲間は森のために何もしようとしなかった。
王様とその仲間は森の資源を食べ尽くして亡んでしまったの。
でも、生き残ったみんなは力を合わせて、自分たちにできることを一生懸命やったわ。
そして、いつまでもみんなが仲良く平和に楽しく暮らせる森にしようと、
ルールをつくり、そのルールをずっと守ってきたの。
そのおかげで、森は再び生き返ったのよ。人間にも、きっとできるはずだわ」
「自然の再生サイクルをこわさないようにすることも、ルールのひとつなんだね」
健太くんの言葉に、森の精はやさしくうなずきました。
「この森に住むみんなも、いつかは死ぬわ。でも、その死は決してむだにはならない。
たとえば、死んだ虫や動物たちが土にかえり、植物の肥料となるように、
次の新しい生命を生み育む力となって、この森でずっと生き続けるのよ。
こうして生命は、次の世代に受け継がれていく。そのことをみんな知っているから、
この森ではモノをむだにしないし、大事に使うのよ」
健太くんとメグちゃんは、森の精の話にじっと耳を傾けています。

森の精やみんなに別れを告げて、健太くんとメグちゃんは森を出ました。

「ようやく戻ってきたか。森のみんなは元気にしてたかね」

そう話しかけてきたのは、不思議な森の入口になっている、あの本棚でした。

「わしは、あの森で200年も生きてきた。

ところがある日、突然人間がやってきてわしを切り倒し、本棚にしてしまった。

ほら、今は森の食堂の食卓になっているという、あの大きな切り株。

あそこが、わしの立っていた場所だよ。

まだまだ森で暮らしたかったな…。

まぁ、本棚になってしまっても、大事に使ってくれるならあきらめもつくが、

たった10年で捨てられてしまった。

200年はガンバル自信があったのに、たったの10年でこのありさまだ…。

本当に情けなくて悲しいよ」

健太くんとメグちゃんには、本棚にされて捨てられてしまったおじいさんの悲しい思いが、

よーく分かるような気がしました。

健太くんは、猫の目で人間の世界を見てみたいと思いました。
街の中へ出かけた健太くんとメグちゃんはびっくり。
街は車だらけで、「ブブー」とうるさいのなんの。
おまけに、排気ガスで空気はひどく汚れています。
しかも、街中ごみだらけ。あちこちにタバコの吸い殻や、空缶、紙くずなどが捨てられ、まるでごみ箱のようです。
「ぼくの住んでる街がこんなに汚いなんて、人間のときは気付かなかったよ」

２匹は次に、健太くんの家へ行ってみることにしました。
健太くんの家の中も、ものでいっぱい。まるで、倉庫に迷い込んだようです。
おまけに、お母さんがいつものようにクーラーをガンガンかけているリビングは寒くて、健太くんは思わずブルブル。
「クーラー、かけすぎだよ…」
横でメグちゃんが笑っています。
「健太くん、いつも暑い暑いって、クーラーのまん前に座ってテレビゲームやってるじゃない」
猫になったこの日、健太くんは今まで気付かなかったことをたくさん発見したのでした。

4.地球のために

夏休みも終わりに近い、ある日――。

そこには、いつもの生活に戻った健太くんとメグちゃんがいました。

でも、ひとつだけ違うことがあります。

それは、健太くんが変わったということ。

今日も、「古くなったから新しいのを買って！」

とおねだりしていた勉強机を、きれいに掃除しているところです。

シールをはがして、マジックで書いた落書を消して、一生懸命大切そうに磨いています。

「もしかしてこの机も、不思議な森の入口でお話した、

あのおじいさんの木でつくられたものかもしれない…」

そう考えると、「簡単に捨てたりできない。もっともっと大事に使わなくっちゃ」と思ったのです。

そのとき、机が健太くんに「ありがとう」と言ったような気がしました。

「メグちゃん、いまの声、聞こえた？」

健太くんの足元で、メグちゃんが「ミャー」と鳴きました。

森の記憶

ECONOMY AS ECOLOGY

監修

岡本久人

発行

エコエコ研究会

編集

社団法人北九州青年会議所

〒802-0052福岡県北九州市小倉北区浜町1-35

北九州市立商工貿易会館5階

電話093 531 7910

ファクス093 551 0212

URL http://www1.sphere.ne.jp/kiks-jc/

E-mail kiks-jc@nifty.sphere.ne.jp

協力

橋本美枝子／文

東方孝／イラスト

同出版局／装丁デザイン

株式会社金研／印刷・製作

R100

● この本は古紙100%再生紙を使用しています。

おとうさま、おかあさまへ

「森の記憶」を読んだ次の日
「コラー！　また食べ物を残して！」
なんて、この本をさらっと読んでほしくないのです

もっと深く楽しく
そして"実現可能な夢"を語って欲しいのです。
ぜひ、『エコエコ宣言ーロングライフ&リサイクル社会への転換』
をご一読ください。

『エコエコ宣言』(エコエコ研究会発行)は
北九州青年会議所事務局でお配りします。
郵送の場合は270円切手を同封の上、
本紙巻末掲載のエコエコ研究会までご請求下さい。

おしまい

[illegible]